

は黒い色と同様に赤い色もその特徴として描かれる男性である。血色の良い頬や赤い唇を持ち官能的な男性であるウォルターは、また、その官能的な生命の柔らかさが「ろうそくの炎」として描写されており、それは精神性を超えたものであると叙述されているように、ウォルターはロレンスがその存在を肯定している男性と思われる。

次に中期の長編小説である1920年出版の『アルヴァイナの墮落』では、主人公アルヴァイナの家庭教師として独身女性のフロスト先生が登場している。彼女は男を知らない女性であり、アルヴァイナが女性として発展することを妨害する存在として批判的に描かれている。フロスト先生は30代であって若いのに白髪が特徴である。そして彼女はアルヴァイナにキリスト教の美德を教え込もうとするが、成長するにつれて彼女はフロスト先生の教えから外れて行き、ジプシーの芸人の1人であるチッチョと結婚するのである。アルヴァイナがフロスト先生から離れる時期を、ロレンスは、エーデルワイスという白い花を捨てて黒紫色と赤色のアネモネの花が重視されるべき時である、と描写している。エーデルワイスは白髪が特徴のフロスト先生の花であり、赤いアネモネの花は、黒い肌のグラハムを愛したり、助産婦になったりして中・上流階級のレディには相応しくない生き方をするアルヴァイナ、更には芸人と一緒になってイタリアの未知の世界へ消えてしまうアルヴァイナの花なのである。

今回は『息子と恋人』及び『アルヴァイナの墮落』の2作品を取り上げて白い色が表すキリスト教世界と機械文明の世界を批判する赤い色が表す「血と肉」の世界を紹介した。このように、赤い色は黒い色と同様に、ロレンスの世界では重要な色として捉えられるべきものである。それは精神性ばかりでなく肉体性を重視することを唱道した彼の思想を表す「血と肉」の色となって彼の作品の多くの場面で描写されている。

## 英語の辞書について（5） 和英辞典

法学部  
北尾 泰幸

### 1. はじめに

語研ニュースNo. 21より英語の辞書に関する連載を続けてきたが、今号でひとまず終わりにしたいと思う。最終回は和英辞典を取り上げる。

学生諸君の中には和英辞典の使用頻度が高く、英和辞典、英英辞典...と連載が続き、なぜ次は和英辞典を取り上げないのかと思った学生もいただろう。私としては、今まで取り上げた英和辞典・英英辞典・コロケーションに関する辞典・シソーラス、そして今回の和英辞典の中では、和英辞典の使用頻度がいちばん低ければ嬉しいと思っている。というのは、和英辞典を引くと、和英辞典を引くだけで終わりにするのではなく、その後で必ず英和辞典や英英辞典、そしてできればコロケーションに関する辞典、シソーラスを引いてほしいと思っているからである。これはどういうことを意味しているのか、説明しよう。

### 2. 和英辞典の引き方

「表現英語」の授業（新カリキュラムでは「Writing」）で英語のライティングを教えている。授業は「英語で考え、英語で書く」ことを目標にして進めているが、今まで英語を書いた経験が少ない学生もいるし、また日本語で書かれた文章を英語に直すのではなく、真っ白な紙に英語を書いていく、いわゆる「自由英作文」の形を取ることが多いので、やはり春学期のうちは日本語を介して英語を書く学生が多いようである。ただ、日本語を頭に浮かべながら書いている状態とはいえ、私は学生諸君は和英辞典を必要以上に引いてしまっているような気がしている。

## 2.1 語を引く前に、引こうとしている語について考える

まず学生諸君によく見られる傾向が、「日本語で浮かんでいる『概念』を英語で書いてみようとするのではなく、まさに考えている日本語を、『そのまま』英語に直そうとする」というものである。以前、授業で、学生から次のような質問があった。

「先生、『やきもきする』って英語で言いたいですけど、いくら辞書引いても載ってないんですけど...」

ええ、おそらく載っていないでしょう (笑)... と思って、いま後から紹介しようと思っている『研究社 新和英大辞典 第5版』(研究社) を引くと載っているのですが (笑)、中型の和英辞典の場合、載っていないことが多いと思う。さて、このとき「やきもきする」とはどういう状態なのか、考えてほしい。文脈にもよるが、「(思うとおりにはいかず) いらいらする」とか、「心配でたまらない」といった意味だと思う。このように語について考えをめぐらしていくと、言い換えることができる日本語の単語が浮かんでくるだろう。そこで「いらいらする」や「心配する」という見出し語を使って和英辞典を引いてもいいが、おそらく学生諸君なら、和英辞典を引かずとも、「あっ!」と当てはまる英単語が浮かんでくるだろう。授業で私に質問した学生も、私が「やきもきするってどんな状態?」と聞くと、自分でこんな状態... と言っているうちに「あっ!」と言って英語を書き始めた。このことから分かるように、まるでインターネットの検索サイトに適当に語を打ち込んでウェブサイトを探すようなやり方で単語を見つけ出すのではなく、とにかく今あらわそうとしていることがどのような様子なのかをしっかり考え、どうしても当てはまる単語が浮かんでこないときに、なるべく平易な日本語で言い換えて和英辞典で調べ、当該の語を探し出す (語の直観を得る、あるいは語の取っ掛かりを得る) という形を取ってほしいのである。

## 2.2 「和英辞典を引くと、手間が増える」(?)

もちろん、表そうとしている事柄に相当する単語が、日本語では浮かぶのだが、英語では何と言

うのか見当もつかないときには和英辞典は重宝するし、また和英辞典を引かざるを得ない状況もあると思う (もちろん、例えば「ほうれん草」を英語で何と言うか全く分からないときに、いくら頭をひねって考えても、ほうれん草に相当する英単語が出てくることはないだろう)。ただ学生諸君は、「引きっぱなし」の状態になってしまっていることがとても多い。

よくライティングの授業で、学生の皆さんに、「和英辞典を引いてもいいけど、手間が増えるぞ」と言う。初めのうちは学生諸君もきょんとしているが、だんだん私の意図が分かるようになってくれる。そしてそのうち、「和英よりはるかに英和を引くことが多くなってきた」と言ってくれる学生が増えてくる。こうなると、私は「しめしめ」といったところである。「引きっぱなし」ではなく、きちんと「調べて」くれていることが分かるからである。

さて、ここで私が言わんとしていることが分かるだろうか。「引きっぱなし」の引き方をしている例を挙げてみよう。

「との関係を切る」というような文を書きたいとする。「関係」は“relationship”だと分かっている、「切る」に相当する英語をどう言うか分からない場合、初めのうちは「切る」を和英辞典で引く学生が多い (本当なら、“relationship”が分かっているのなら、連載 (3) で紹介したコロケーション辞典を引いてほしいのだが)。そこで、「切る」を引くと、たくさん単語が並んでいる。そこで、その「切る」がどういう文脈で使う「切る」なのかを吟味せず、「何となくよさげな単語」、あるいは「気に入った単語」を選び出して使ってしまうのである。すると、例えば次のような動詞句ができあがる。

- (1) a. \* chop a/the relationship
- b. \* hang up a/the relationship

ここで使われている動詞は、確かに (2a, b) のような形では「切る」という意味を表すが、“relationship”とは共に使われない語である。

- (2) a. chop a/the branch (枝を切る)

## b. hang up a/the phone (電話を切る)

よって、和英辞典を引いて語を選び出した後は、「必ず」その単語がいま書こうと思っている文脈で使える語なのか、英和辞典あるいは英英辞典で調べてほしいのである。英和辞典や英英辞典の語義だけではなく、例文をしっかりと見て、選び出した語のニュアンスを感じ取る作業を必ず行ってほしい。このように、「和英辞典を引くと、必ず英和辞典（英英辞典）を引く」ということを、肝に銘じて和英辞典を引いてほしい。つまり、「和英辞典を引くと、もれなく英和（英英）辞典がついてくる」ので、「手間が増える」のである。これからは、和英辞典だけを引いて、数多くの候補の中から気に入った語を選ぶのではなく、英和辞典・英英辞典（あるいはコロケーション辞典）を使って「語の絞り込み」を行ってほしいのである。そして、この「手間が増える」のを嫌がるのではなく、喜んでほしいのである。

### 3. 和英辞典について

和英辞典も数多く出版されており、それぞれ一長一短がある。今までの連載で挙げた辞書のように「この和英辞典が一番」というのは挙げにくい。というのは、上にも書いたように、和英辞典だけでは不十分なので、不十分な点を英和辞典や英英辞典で補ってほしいからである。

そこで、次の3つの和英辞典を、それぞれ別の角度から紹介したい。

渡邊敏郎、E.Skrzypczak、P.Snowden（編）  
（2003）『研究社 新和英大辞典 第5版』研究社

日本で出版されている和英辞典でいちばん分厚い類に入る。収録項目は48万項目。ありとあらゆる語が載っている。また編纂には英語の研究者だけでなく日本語の研究者も携わっており、日本語もしっかり吟味したうえで、日本語の意味合いを存分に伝えられる英語にするように心掛けて編纂されている。第4版までは見出し語がローマ字で書かれていたが、この第5版からはかな表記になった。よって、学生諸君は引きやすくなったと思う。「英語の単語を探し当てる」のには優れた辞書で、

この辞書を引けば、たいいていの語は見つけられると言っても過言ではないだろう（ただ、何度も言うように、見つけた後は必ず英和辞典・英英辞典で本当にその語が書こうとしている文脈に合った語であるかどうか確かめてほしい）。

小島義郎、竹林 滋、中尾啓介、増田秀夫（編）  
（2005）『ルミナス和英辞典 第2版』研究社

携帯できる中辞典である。和英辞典は上にも書いたように、語が並べられているだけで語法などについて記しているものは少ないが、この和英辞典は訳語を単に羅列するのではなく、それぞれの語がどういうニュアンスで使われるのか、日本語で少し説明がつけられている。例えば上に挙げた「切る」の場合でも、  
の場合の「切る」はこの語ということが分かるような工夫が施されている（ただ、十分ではないので、英和辞典・英英辞典でダブルチェックしてほしい）。またコロケーションを意識した例文を挙げるようにしているので、学生諸君にとっては、書きたいと思っている例文が見つかることが多いかもしれない。和英辞典の中では、比較的「語法」を盛り込んだ辞書であり、単に語を並べているだけの辞書ではなく、「プラスα」を図った辞書と言えるかもしれない。

『英辞郎 第六版』アルク（2011年6月に第六版が発行される）

あらゆる語が載った辞書を作ろうという人たちで作る EDP (Electronic Dictionary Project) が改訂し続けている辞書である。CD-ROM 版で発売されており、コンピュータにインストールして使う。アルクのホームページ (<http://www.alc.co.jp>) でも「英辞郎 on the WEB」を使うことができる。

ただ、この辞書は十分注意して使わなければならない。とにかくウェブサイトを含め、いろんなところから用例を集めてきているので、用例が間違っていたり、あるいは間違っていなくとも、あまり使われない言い方が載っていたりすることがよくある。検索サイトを使うがごとく、訳したい語を適当に日本語で打ち込むとそれらしい単語がヒットするので使い勝手はよいのだが、英語の語

感が優れていないうちは、他の和英辞典以上に、英和辞典や英英辞典での確認作業が必要になる。第六版は182万項目収録されるということで、確かに私も今までの旧版でも役立った経験が何度もあるが、十分注意して使っていただきたい。

#### 4. 和英辞典の編纂作業

少し話が逸れるかもしれないが、本稿の最後として、私は大学院生の時に、和英辞典の編纂作業（執筆作業）を間近で見たことがあり、そのときの話を少し書いてみたい。

現在は武庫川女子大学で教鞭を執っておられるが、当時、大阪大学大学院言語文化研究科で教えておられた Stephen Boyd（スティーブン・ボイド）先生が、英語学や英文学研究者だけでなく国語学・国文学研究者やその他の分野の研究者とともに分担して、上記の『研究社 新和英大辞典 第5版』の執筆をしておられた（ちなみにボイド先生は、連載（3）で挙げた『新編 英和活用大辞典』の執筆もしておられる）。ボイド先生はイギリスのご出身で、日本に長期間住んでおられ、日本語の感覚も優れていらっしゃるのだが、辞書の場合、普段あまり使わないような語も見出し語として設定する必要が出てくるし、また先生は語の細かいニュアンスをしっかりと理解したうえで英語の訳をつけたいというお気持ちがあり、先生の研究室に行くと、よく「はこういう意味でいいだろうか」と、執筆中の項目についてそのニュアンスを私に聞いてこられた。細部までしっかりと考えておられ、またなるべく日常で使う言い回しや例文を挙げたいというお気持ちが強く、推敲を重ね、何度も書き直しておられた。この辞書は前回の第4版の発行から約30年経っており、みんなが新しい版の出版を待ち焦がれていた本である。「早く出版されてほしい」という気持ちと、間近で見ていることもあり「焦らずに取り組んでいただきたい」という相半ばした気持ちで執筆の作業を見せていただいていた。先生が書いたものがいつもそのまま採用されるというわけではなく、他の執筆者からの意見を受け、更に推敲を重ねることもある。「辞書の執筆は本当にたいへんな作業だ…」と思った。

ちょっとした自慢になってしまうかもしれない

が（笑）、実は私がボイド先生の部屋で何気なくつぶやいた言葉から、日本の和英辞典で初めて項目として載った単語があるのである。それは、「別腹（べつばら）」である。「そういえば、よく『別腹』って日本語で言うんですけど、和英辞典ではどれを引いても載ってないんですよね…」と若かりし頃の私が言ったところ、それまで笑って話をしていた先生が、話をやめ、急いで編纂中の辞書の見出し語で「へ」のところを見て、「『別腹』はやはり挙げていない。」と言った後、研究室の本棚にある和英辞典を片っ端から引き始めた。私も何気にぼつりと言っただけなのだが、真剣に辞書を引く先生の姿を見て、私も先生の本棚にある辞書を引き始めたが、やはりどこにも載っていなかった。先生いわく、「『へ』の訳の作業はもう終わってしまっている」とのこと。だが、「どうしても入れたい」とおっしゃって、研究社に連絡を取り、何とか今から「へ」の項に「別腹」を入れることができないか交渉し、結果、「別腹」の見出しが晴れて和英辞典に載ることになった。ちなみに、『研究社 新和英大辞典 第5版』で、先生は次のように訳された。

#### (3) べつばら【別腹】

おなかいっぱいだけど、ケーキは～よ。

I'm full, but 'I could fit in [there should be room for] some cake.

これでもまだ日本語で言うところの「別腹」のニュアンスが伝えきれていないようで、先生はもうひとひねりしたいようであったが、英語ではこれ以上うまくは言えないとのことであった。確かに、英語の表現では「まだ入る余地がある」とか「何とか入れられるよ」という感じだが、日本語の「別腹」は「入る余地は本当はないけど、ケーキとなると話は別だ」という感じかもしれない。ただ、この英語の表現もなかなか面白く、パツとは出てこない言い方であろう。もしかしたら次の第6版が出るころにはさらに磨きがかかった訳になっているかもしれない、今から楽しみにしている。

ちなみに、この『研究社 新和英大辞典 第5版』以降は、和英辞典でも徐々に「別腹」が見出し語として取り上げられるようになってきた。例えば、

『ウィズダム和英辞典』(小西友七(編)、三省堂、2007年)なども「別腹」を取り上げている。

## 5. まとめ

今回は和英辞典を取り上げ、特に「和英辞典の使い方」について説明した。和英辞典を使ってはいけないというのではなく、より効果的に和英辞典を使うために、和英辞典を使った後は、必ず英和辞典あるいは英英辞典で、調べた語が文脈に合致するものかを確かめるとともに、語法を確かめていただきたい。「和英辞典を引いたら英和辞典(英英辞典)」を常に頭の片隅に置いて英語を書いていたいただきたい。

これまで5回にわたり英語の辞書の連載を行ってきたが、楽しんでいただけただろうか。もしかしたら最も楽しんでいただけたのは原稿を書いている本人だったかもしれないが(笑)、学生諸君の英語学習の一助になれば幸いである。実は辞書好きの私はまだいろいろと書きたいことがあるのだが、また授業でお話できる機会があればと思う。

### 洋書を楽しむ先輩たちが紹介する の洋書(1)

～短編から中編の児童書や絵本を中心に～

2010年度 経営学部卒業生

森彩乃、上田瑛里、村瀬晶子

法学部

小坂 敦子

洋書を読むのも大好きな私は、電車の中で読んでいるうちに、すっかりひきこまれて乗り過ぎてしまったり、寝る前に少しでも読もうと思いつつも、「もう1章」、「もう1章」と思っているうちに寝不足になってしまったりします。

今日は、洋書を読むのを楽しんでいた先輩達か

ら、読みやすく、かつ大人も楽しめる児童書の洋書から、お気に入りの作家、おススメの本やシリーズの紹介をお届けします。

まずは、ケイト・ディカミロという作家の作品に出会って、「英語であっても、日本語で読んでいるように話が頭に残るようになったし、物語を楽しみながら読むことができるようになりました」という森さんが、ケイト・ディカミロの魅力を語ります。森さんは、在学中、数十～二、三百ページ程度の洋書を何冊も読破していた一人です。次は、いろいろなジャンルの、数多くの作家の英語の児童書や絵本をどんどん読んでいた上田さんが、今年の干支にちなんで、著者の発想に思わずくすくす笑える *Bunnicula* を選んでくれました。最後は、絵やイラストが好きで、お気に入りの作家が何人もいる村瀬さんが、英語が苦手な人にもおススメできるという、イラストも個性的な魔女のシリーズ物の登場です。村瀬さんはこのシリーズは7冊ぐらい読了です。

今後もしろいろな洋書を紹介していきたいと思いますので、お楽しみに！ (小坂)

ケイト・ディカミロ (Kate DiCamillo)

2010年度経営学部卒業生 森彩乃

私が最初に読んだケイト・ディカミロの作品は *Because of Winn-Dixie*<sup>1</sup> です。これは、引っ越しで新しい土地にやってきた女の子とスーパーに迷い込んだ犬の話です。この本を小坂先生から紹介していただいた理由は、私が犬好きだから。長めの物語ではありましたが、主人公といつも行動を共にする犬が登場するので、時間はかかりましたが、最後まで読むことができました。この話は、子供向けということもあって単語もそれほど難しくなく、行間も広いし、文字も大きめなので読みやすいと思います。「これから長編にも挑戦していこうという人」にオススメです。

私がケイト・ディカミロに出会ったのはこれが最初ですが、彼女はこのほかにも魅力ある動物が登場する作品を多く書いています。私が読むことが出来たのは彼女の作品の中のほんの一部ですが、それぞれに魅力があり、毎回楽しく読むことができました。